
アル夏ノヒ

54

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アル夏ノヒ

【Nコード】

N6593H

【作者名】

54

【あらすじ】

ある夏の日、俺はとてつもない大冒険をした。一般人だった俺は、あの子に会ったとき、まだ普通の生活をしていたが。一人の存在でこっぴどかわちまうとな。

ジョン・スミス。(前書き)

自分が少なからず影響を受けた作品のパロが少しは言ってるかもです。もしひまだったらそれを当ててみやがってください。

ジョン・スミス。

暑い。当たり前だ。今は夏だろ。

そんな自問自答をしながら、田舎町を自転車を漕いでいた。地球温暖化が現在進行形で、オゾン層の隙間から漏れた熱射が地面を暖めている。町を見守る、樹齢500年を越えるご神木、通称”棕の木様”は、老体を傾けつつも今日も枝を風に揺らさず耐えている。こんなに頑張らなくてもいいのに。ちつとは休めよ、太陽さんよ。喉が乾いている。マジでくたばる5秒前、もし俺の脳と水晶体がこの暑さで狂っていなければ、今俺の網膜は短いひさしに立つ自販機を映している。

自転車を止め、ひさしに入る。うん、俺の身体はまだまだ正常だ。しかし、俺の網膜は、自販機に集中していたせいかな、自販機の前にしゃがむ少女には気付けなかった。

その少女は、黒い瞳を真一文に国道に向けている。このひさしは、自販機の前に人がやっと立てるぐらいの縦しか持たず、その少女の首から先は、太陽光の餌食となっていた。もしこの状況で暑くないという奴は、よっぽど感覚が麻痺しているか、とにかく病院に行かねばなるまい。その病院の先生なら丁寧に優しく診てくれるぜ。とにかく、その小学5、6年、俺と同じ年（12）か一つ下くらいだろう。（今まで人の年を一発も外したことはない俺が言うんだ、間違いない。）

その少女も、汗だけで暑そうだった。顎、黒い長いまつ毛、ちょっと高めの鼻から汗がひっきりなしに落ちている。

地面に落ちた汗は、白い跡を残して乾く。それよりちょっと右だったり、上だったりするところに、また落ちては乾きを繰り返し、地面には白い跡が無数にある。濡れ鳥という昔の人のいう大和撫子のような黒髪は、太陽光を鋭く反射して、キラキラ光っている。頭の

横でくくられたツインは、肩まで垂れて、毛先から汗の雫が肩から二の腕を伝っている。ホルターネックのズボン真上まで大胆に開いた背中には、汗が突然急速発達した入道雲のもたらしした夕立の雨が伝うガラスのようにながれ、わずかしかない布地は汗染みに占領されてしまっている。脇腹には、脇から垂れ落ちる汗が幾筋にもなつて、ナイアガラ滝のようになってしまっている。多汗症か？こいつ、多汗症なのか？

俺は、自販機でコーラを二つ買い、一つを、ホルターネックの濡れた背中に押し付けた。

「ひゃあ！？」

「・・・飲むか？」

「・・・ハ、ハイ。」

ちなみにそれは、俺の嫌いなペシ社の0コーラだ。俺はコーラはコ社のスタンダードって決めてんだ。

「暑いですネ。」

彼女は俺が押し当てたコーラをぐびぐび飲んでいいる。こめかみ、顎、首筋コースを旅した汗が、発達しつつある彼女の胸の谷間にど真ん中剛速球ストライクを繰り返し、扇子のようにだんだん筋が谷間に集中していくように道筋を作っている。俺の横に立つ姿は俺より背が少し高い。ちっ、おもしろくねえ。

買った人より早く飲み終わると、

「あたし、海雲茜です。」

なんだこの子は。将来選挙に出るべく今から票を集めているのか？

「・・・あなた、名前は？」

あ、そーいうことか。一生の思い出にして、大人になったら某探偵番組とかに依頼して、お礼を言いにきたりするのかな。でもすまんが、俺は初対面じゃ名乗らないタチなんだよ。

「・・・ジョン・スミス。」

「そ、そうなんだ。」

そういうことにしてくれ。

その子の胸元、脇腹、背中、汗染みがあった部分には、白い粉末のようなものが残っていた。

ジョン・スミス。（後書き）

これは、昔夢でみた内容を、今日自転車漕いでいたら急に思い出して、完成させたりしました。そして、ある程度のあらずじは完成させました。舞台は、自分が住む町の周辺を考えています。ところどころヒントを書いていく予定なので、暇だったら当たてみやがってください。（今回第一話にはヒントはありません。書こうとは思ったケド。）

「両親は、いないのか？」（前書き）

自販機で謎の少女と出会った。その子は、突然名前を聞いてきた・・
・。

「両親は、いないのか？」

その晩

ピンポン

来客だ。母ちゃんと俺は、玄関に出迎える。

客は、俺より少し背の高い少女。ん？背の高い？少女？

その子は開口一番、

「やつ！昼間のジョンくん！」

俺の身体は、この一言で思考停止と共に頭が爆発してあと少しでさ
んずの川をわたる所まで行き、川に流され現実に戻ってこれた。あ
の子だった。自販機で出会った、あの汗だく少女。

あの時の黒のホルターネックではない。着替えたのだろう、黒いが
少し大きめの紐の細いキヤミとなっていた。しかし黒好きだな。葬
式にでも行ってきたのかよ。

「最近引越してきました、海雲ともうします。ここの坊ちゃんに
コーラを頂いて感謝しておりますー。。」

と、母と茜と名乗るその少女は、一緒に深々と頭を下げる。茜の両
手には、盛蕎麦が持つてあった。ちなみに、紹介文に俺が頭を爆発
させたのは言うまでもない。

「ぼくねー、散歩していたら道に迷って、帰り道が分からなくなっ
て。だってまだ来たばかりだからさー、汗ベトベトだし、本当に
泣きそうになったんだ。コーラおいしかったよー」

ちなみに、あの自販機からちよろつと歩くと実は地図看板があつた
が、この子のピュアな考えを踏みにじると考え黙って話を聞く。

話すのに一生懸命なのか、ダブダブなキャミの右肩ひもが徐々にズレていつてるのに気づいていない。それよか仲が良くなったら「ボクっ娘」になるのかよ。

「というわけで、明日あそぼーよ！ぼくね、野球好きなの！」

左肩ひもまでもが腕まで落ちた時によりやく気づいたらしく右肩ひもをつまみ上げ、左は腕を上げて俺に腋を見せて元の場所に安置させた。

はいつ、んで次の日の昼！

今日もクソ暑い。黒のYの字になっているキャミを来た茜は、グラブ（ん、古いか）と硬球（！）を持ってきた。

「キミンち狭いから、その山に公園があるらしいね。その公園でキャッチボールしようよ！」

ケンカ売ってんのかと言いそうになったが、黒い瞳の奥に、輝くなにかがあつたので、言えなかった。ちなみにその山、歩いて一時間かかることにこの子は気づいていなかった。

俺も忠告しそびれたので、二人でえっちらおっちら暑い中を歩き、山の公園に着いた。

「ここまで遠くなるとはおもわなかったけど、やろうか！」

耳たぶにまで汗を滴らせながらよー言うよ。せめて休憩しようぜ。「エー。」

茜は、女ながら、なかなかいい球を投げる。少年野球で半年エースを勤めた俺が言うんだ、間違いない！

「・・・それ、ちと短すぎる」

ここまででは、俺はこの子のことをちょっとおてんばな子だと思っていた。

しかし、ここから、俺の夏休みは激変する。

「そう言えば、お前昨日、一人で挨拶に来たよな。両親は、いないのか？」
フツと茜は、顔を曇らせた。

「両親は、いないのか？」（後書き）

キャッチボールと茜が・・・（ネタバレのため伏せ字）な部分まで、はつきりと構成しましたが、この先はぼんやりです。

金の困惑も銀の困惑も普通の困惑もいりません。（前書き）

少し展開が苦しくなってきましたが、まだまだ序の口ですよー。
あっと驚く展開ができあがったり、いなかったり。

金の困惑も銀の困惑も普通の困惑もいりません。

「何か、深いワケがありそうだな。」

「・・・すいません、ここでは言えませんが、言えない・・・言えない！」
鳥羽の養殖真珠でもこうはいかんだろうと思うくらいの大粒の涙が、ぼろぼろと茜の暑さで赤くなった頬を伝い落ちる。

「悪いこと、聞いちまったみたいだな。」

せめてもの慰めのつもりで、湿っている肩を抱いた。

この山の下小学校に存在する、樹齢500年のご神木が、心なしか少し暑さにくたばってるように見えた。

どうやらこいつには親はもう死んでしまった見某人なのか。俺もその気持ちには分かる。祖父祖母同時にいつちまった時は、俺もそうとう悲しんださ。まるで、両親を失ったようにな。

俺は、ぐすぐす言う茜を、家まで送ってやった。

その夜、俺は奇妙な夢を見た。

突然、小学校の神木が、揺れ始めた。目、鼻、口の形に朽ち果てた穴が、拡大していく。

まるで、なにかに苦しんでいるように。これは、何かの暗示か。町の宝の椋の木翁に、何か魔の手でも来ているのか。つーかなんでこんな悪夢を見てるんだ。夢の内容がこんなにはつきりつーことはこれは瞑析夢であって、えー、えー、とにかく、どこかにフロイト先生の書かれた辞書かなんか、落ちてないのか。などと、俺の頭がパニックを起こし始めている。

落ち着けえー、落ち着けえー。

気が付くと、俺は椋の木の前にいた。

冷たい汗が、喉を伝ってシャツに吸い込まれ・・・ん？俺はちゃんとパジャマを着て寝たぜ。そこら辺の坊主らと違って、シャツとパンツなんて格好はしない。ジャージなんてもつてのほかだ。この格好は、昨日来てた服じゃねえか。今日の服ではない。

すると、木の上に、強い光が表れた。きこりが斧を放りこんだ泉の女神のような少女が、斧を差し出す代わりに困惑な表情を浮かべた。俺は金の困惑も銀の困惑も、果てさて普通の困惑もいりません。

目が覚めると、外は昼になっていた。今日も、暑くなりそうだ。

どっか抜けてるな、お前。(前書き)

自販機で出会った少女にコーラを奢ってやった俺は、
その夜に奇妙な夢を見た。

俺の町を守るご神木に、何か異変が起きている？

どっか抜けてるな、お前。

ところで、こう思ったことはないか。

もし、自分の親しい人は、実はものすごいプロフィールを持っているのではないか。

宇宙人だったり、時間跳躍の方法を知っていたり、魔法が使えたりできる人が、この世に最低一人はいるんじゃないのか。もしかしたら、自分には、まだ世界的に未知なる力を、実は持っているんじゃないか。

俺もそう思ったさ。だから俺はいろんなことをしたな。幼い頃の夏休みに宇宙人と交信すべく、空気を乱さぬように窓を閉め切って、扇風機もクーラーも付けず三時間座禅を組んでみたり、助走を付けて階段から飛んでみたり、ろうそくの火に向かって1000回ぐらい気を送ってみたが、ただ汗が地面をぬらただけだったり、おっこちて全治一ヶ月のケガを負ったり、結局ばあちゃんがやってきて火を消されたりと、何一つ成功しなかった。他にも授業中に前の奴の頭の中が見えないかと凝視したり、えんぴつに視線集中もさせたりと徹底した。

えーあー、何が言いたいかと思ったか。いや、すまん。さて、今の俺は、現状をどう考えているのだろうか。小学校最高学年になってから、そういうのは卒業したと実は勝手に思いこんでいたのだだろうか。この世は、なぜこういう風に来ているのか、物理法則を発見したアインシュタインは、宇宙人なんじゃないのだろうか。この世は、今、普通なのか。まだ、何か不思議な経験をしている人がいるんじゃないか。

だとしたら、なぜ、俺がそうじゃないのだ。あ、すまん。もっと分からなくなっただか。

夢から覚め、散歩でもするかと外に出ると、茜が、塀を背にして、地べたに、あぐらをかいていた。

俺をずっと待っていたようだった。白いホルターネックワンピースから大きく露出した、これまたどんなにこのまま放っておいてもやけそうにないまばゆい白い背中を伝う汗の粒の数が、それを物語っている。横からのぞいてやる。そーっ。げっ。眠ってやがる。麦わら帽子の頭をこっくりこっくりさせ、顎から汗を落としながら、茜は昼寝していた。

しょうがなかったから、背中に一発平手打ち。心地よいくらいのはしいっ！という音が響いた。

茜はひっ！というと、汗だくの背中をさすり、俺に気づくと立ち上がり、きまりが悪そうに下を向いた。やっと起きたか。

「・・・今日は、大事な話があって、来ました。」

麦わら帽子の陰からのぞく目は、汗が付いてる睫毛に縁取られ、真摯なまなざしを俺に向ける。

「・・・あたしのこと、あなたのこと。」

そんなシリアスな話を告げるのに、寝てたのかよ。どっか抜けてるな、お前。

「こっちに・・・来て。」

どっか抜けてるな、お前。（後書き）

いよいよ次から、最大の山場になります。
少し完成度をあげたいので、時間がかかります。
少し待っていてください。

霧の向こうへ。(前書き)

だんだんそれらしくなっていました。

いままでほのぼの路線だったのが、今回から少しシリアスに行こう
と努めてます。

霧の向うへ。

茜は、俺をどこかへと導いている。背中側に垂れる長い黒髪から流れ落ちる汗が、地面に落ちまるで道しるべのようだ。交差点を渡り、関川にかかる竜瀬橋を渡り、県立高校の前を通り、カーブを曲がった。その先は、霧に包まれていた。

ところで、霧ができる仕組みをご存じだろうか。

霧は、雲が地面に接することが出来ると、ウ キペディアに書いてあった。

俺が住む町は、盆地なので、よく霧が発生する。そのおかげで少し高速を登るとある茶畑の茶はうまいのだ。しかし、この霧は、何か変だった。

茜はなぜか、俺の出身小学校を知っているようだった。なぜなら、この道は、俺が小学校の頃通っていた道と、全く同じだったからだ。そして、霧は、学校に近づくに連れ、濃くなっていく。

「離れないでね。」

茜が、ぽつりと忠告する。

少し空気がひんやりしている。地面の道しるべの水滴は、なぜか今度は茜の前から続いているようだ。

「おい、茜。この霧、何か変だぞ。」

返事がない。

「おい！」

やっぱり返事がない。

「おい！！！」

何遍言っても返事がないので、茜を追い越して肩をつかんだ。

「！！！」

茜の前から落ちる水滴の正体は、茜の涙だった。

「おい、どうした。」

両目頭の涙が唇まで到達し、両目尻の涙は顎でつながって、水滴を作る共同作業をしている。

「・・・行けば、分かります」

とりあえず学校に着いた。茜は、ブランコに、へたり込むように座った。

「なぜ俺をここまで案内した。あと、お前、この霧の正体について、何か知っているようだな。」

「・・・ジョンくん、ごめんね。」

突然、目の前が真っ暗になった。

霧の向こうへ。(後書き)

どなたか私の頭に少し知識を注入させてください・・・科学的トリックが思いつきません・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6593h/>

アル夏ノヒ

2010年10月10日03時01分発行